

Product Reviews

CSSサポートとMX 2004ファミリー同士の連携で作業効率と生産性が大幅にアップ

Macromedia Dreamweaver MX 2004 12月5日発売

マクロメディア

価格: 48,000円(商用版・ダウンロード版) 12,000円(エデュケーション版)



ダウンロード版はすでに販売中。

ブラウザのプレビューなしでCSSを直感的に操作

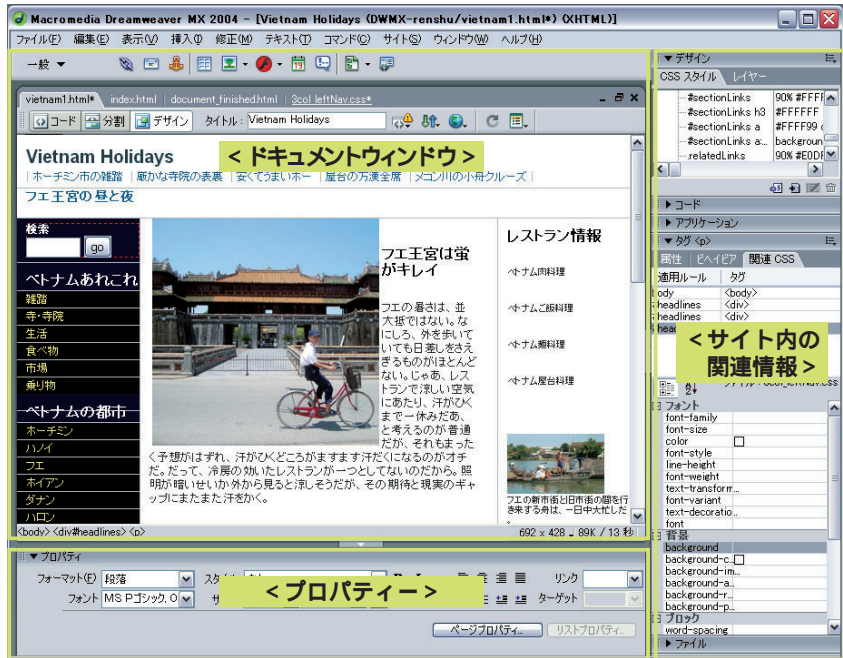
マクロメディアから、ウェブサイト構築ツールの新バージョン「Macromedia Dreamweaver MX 2004」が登場した。Dreamweaverは、Adobe Goliveと並んでプロのウェブサイト制作者の間で人気が高いが、ページデザインを重視するデザイナーの利用者が多いGoliveに対して、DreamweaverはHTMLソースを直接、手で書き換えるプログラマーの利用者が多いと言われる。

Dreamweaverの新バージョンMX 2004で特筆すべきは、デザイン重視のGoliveにも不可能だったCSS(カスケードスタイルシート)を設定したウェブページのツール内での表示が可能になったことだ。

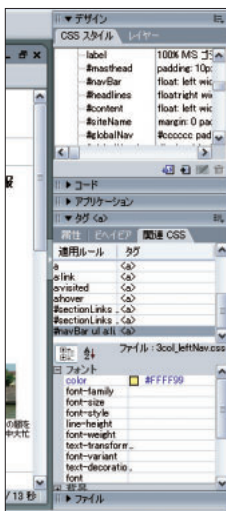
CSSとはウェブページの「見栄え」を指定するためのもので、これによりウェブページで印刷物に近いレイアウトが可能になっている。ただし、フォントの種類、サイズ、色やマージン、背景色といったスタイルの設定を、作ったその場で直接確認できる編集ツールはこれまで1つもなかった。作成したページファイルをウェブサーバーにアップロードして、ブラウザで表示しない限り、その効果を作成者が確認できなかったのだ。

これでは直感的な作業はできず、作業効率も上がらない。Dreamweaver MX 2004は、この問題を唯一解決するツールとなっている点が最大のウリだと言えるだろう。

もちろん、表示だけでなくCSSの設定や編集作業自体も格段に行いやすくなっている。作成中のウェブページ内をクリックすると、「タグ」項目内の「関連CSS」項目に、ページに設定されているCSSの内容が表示され、ここから設



左上はドキュメントウィンドウ。ウェブページは、タブブラウザのようにタブで表示を切り替える。その下がドキュメントウィンドウ内で選択しているもののプロパティで、右にはサイト内の関連情報をカテゴリ別にまとめたパネルが並んでいる。



選択範囲のCSSの設定は「タグ」項目内の「関連CSS」項目に表示され、属性値を変更するとその結果は即座にドキュメントウィンドウに反映される。また、サイト内に設定されているCSSは、すべて「デザイン」項目内のCSSスタイルに表示される。

定内容を変更するとその場で変更がドキュメントウィンドウ(編集集中のページを表示するメイン画面)で確認できる。また、「デザイン」項目内



ドキュメントウィンドウの表示には、ページデザインを確認できる「デザイン」ビューと、HTMLコードを表示する「コード」ビューの2種類があり、どちらか一方あるいは両方を同時に表示することもできる。

にある「CSSスタイル」の項目を見れば、どこにどんなスタイルが設定されているかをすぐに確認できる(左上画面参照)。

ウェブサイト開発の作業効率を上げ生産性を高めるさまざまな新機能

もちろん進化した部分はCSS対応の部分だけではない。たとえば、ウェブページ内で表などを作るテーブルも編集しやすくなっている。従来、テーブル幅はデフォルトではウィンドウいっぱいには設定され、必要に応じてピクセルまたはパーセントで絶対幅を指定するのが一般的だった。これに対して、新バージョンではデフォルトでの絶対幅をあらかじめ指定できる。しかも、編集しているドキュメントウィンドウにテーブルの幅がピクセル値で表示されるため操作しやすい。列や行の挿入、削除、セルの結合、分割といった操作も実に簡単だ。

ウェブサイトを作る側にとって、ブラウザの種類が数多くあって作成したページがそれらのブラウザで正しく表示されるかどうかを確認する作業には手間ひまがかかる。新バージョンには、この作業を軽減してくれる機能も加わった。ファイルオープン時に、HTMLタグやCSSなどの設定が指定したブラウザに適合しているかどうかを自動的にチェックしてくれるのだ。

さらにDreamweaverを使えば、ASP、ASP.NET、J2EE、JSPやPHPなどに対応したダイナミックなウェブサイト構築できる。ほかにも、ファイルやデータへの不正アクセスを防ぐためにSecure FTPに対応したことや、マイクロソフトのWordやExcelで作ったドキュメントがフォントやカラーの設定を崩さずにページ上に貼り付けられるようになった点など、ウェブ構築作業を助けてくれるさまざまなバージョンアップが施されている。

MXファミリーとのシームレスな連携で作業効率はさらにアップ

今回、発売されるMX 2004ファミリーは、Dreamweaver MX 2004だけではない。ほかにもFlashコンテンツ作成ツール「Flash MX 2004」「Flash MX Professional 2004」とウェブグラフィック専用デザインツール「Fireworks MX 2004」などがあり、これらはセットで「Studio MX 2004」としても販売される。これを見てもわかるように、Dreamweaver MX 2004はほかのMX 2004ファミリーと連携してこそ本来の力を発揮する。

たとえば、Dreamweaverのドキュメントウィンド



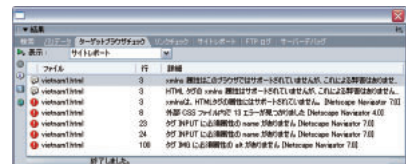
テーブルを作成するには、メニューバーの「テーブル」ボタンをクリック。この画面を立ち上げてテーブルサイズを決定する。「OK」をクリックするとページにテーブルが挿入される。行や列の挿入/削除、セルの分割/結合などのテーブル編集は、直感的な操作で簡単にできる。

ウ上で編集したい画像をクリックすると、プロパティウィンドウが表示される。このときプロパティウィンドウ内にある「編集」ボタンをクリックすれば、Fireworksが起動して、アプリケーションを切り替えなくても、画像を編集できるのだ。また「最適化」ボタンをクリックすると、自動的にFireworksを使ってウェブ上の画像をウェブ公開に適したサイズなどにすぐに変換できるようになっている。インタラクティブかつダイナミックなコンテンツ作りに欠かせないFlashムービー編集ツール、Flash MX 2004とDreamweaver MX 2004も、もちろん連携動作が可能だ。Flashムービーのプロパティウィンドウ内にある「編集...」ボタンをクリックすると、Flashが起動する仕組みだ。

Dreamweaverの大きな強みは、これらMXファミリーの存在だ。しかも、MX 2004ファミリーは、共通したインターフェイスを採用しているので操作に一貫性があり、違和感なく各ツールを行き来できる。こういった統一された環境の中で、普通のコンテンツからリッチコンテンツまでを作成し、ウェブ制作の効率を上げたい人には欠かせない製品となるだろう。(藪 暁彦)



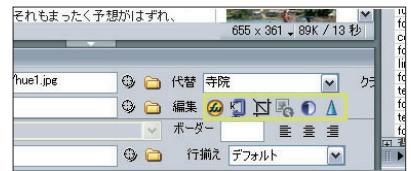
「Flash MX 2004」もしくは「Flash MX Professional 2004」と「Fireworks MX 2004」「FreeHand MX」そして「Dreamweaver MX 2004」がセットになった「Studio MX 2004」Flash MX Professional 2004を含むものが120,000円、Flash MX 2004を含むものが98,000円となっている。



Dreamweaverは、ファイルオープン時に指定したブラウザとの互換性をチェックしてくれる。もちろん、編集中に手でチェックすることも可能だ。上はその結果を表示したところ。



ドキュメントウィンドウ内でマウスボタンを右クリックすると、マウスカーソルのある場所で利用できるすべての操作がポップアップメニューに一覧表示される。シンプルだが意外に便利な機能だ。



画像を選択したときに、画面下に現れるプロパティには、画像の属性と同時に画像編集用の6つボタンが表示される。このうち右の4つは、Dreamweaverに内蔵されているFireworksのテクノロジーを利用して簡単な編集を行うためのボタンで、左の2つをクリックするとFlashが起動する。



同様に、Flashムービーを使ったウェブページでは、プロパティにFlashアイコンが付いた「編集ボタン」が表示される。これをクリックすると、Flash MX 2004が起動する。

ウィンドウズ

OS	ウィンドウズ98 SE/2000/XP/ウィンドウズサーバー2003日本語版
CPU	Pentium III クロック周波数600MHz以上
ハードディスク空き容量	275MB以上
メモリー	128MB以上の空きメモリー (256MB以上を推奨)

マッキントッシュ

OS	Mac OS X 10.2.6/10.3日本語版
CPU	PowerPCG3 クロック周波数500MHz以上
ハードディスク空き容量	275MB以上
メモリー	128MB以上の空きメモリー (256MB以上を推奨)

iPodユーザーなら導入して間違いなし LAN内の音楽ファイルを共有できる音楽プレイヤー

iTunes 4.1 for Windows

無料公開中

アップルコンピュータ

価格：無料

MusicMatchではできなかった iPod内のアーティスト検索も可能に マッキントッシュの音楽プレイヤーソフトとして 人気の iTunesが、初めてウィンドウズにも対応し、「iTunes 4.1 for Windows」(以下、iTunes4)として、アップルコンピュータのサイトからダウンロードが可能となった。いきなり結論から言おう。ウィンドウズ環境でiPodを使っているのであれば、間違いなく導入すべきだ。これまで、ウィンドウズでiPodを利用するには、パソコン側で音楽ファイルを扱うソフトに「MusicMatch」が必要だった。MusicMatchでは、iPodの中にある曲をMusicMatch側で見た場合、曲名が一覧されるだけ。iPod内のアーティスト別検索などができないという難点があった。iPodを十二分に活用するなら、iTunes4は最適のプレイヤーと言えるだろう。さらに、iTunes4で特筆すべきは「スマートプレイリスト」と呼ばれる一種の検索機能を使うことで、目的に合致した楽曲ばかりを一瞬にして集めることができる機能だ。たとえば、1976～1979年にリリースされたCDの1曲目ばかりを集める、といったユニークなプレイリストの作成も一瞬にして可能だ。そのほか、iTunes4には、ネットワーク越しにLAN内のほかのマシンにあるiTunes4の楽曲をストリーミングで聴く音楽共有の機能が備わっている。難しい設定など不要で、同一LAN内でiTunes4を起動したマシンがあれば、iTunes4の操作画面に相手の名前が自動で現れる(公開許可設定をしている場合)、家庭内な

どで音楽を共有したいような人であれば、iPodを持っていなくても導入する価値はあるだろう。ほかの音楽プレイヤーと比較して一長一短があるのは、インターネットラジオの再生機能だ。ジャンル、ビットレート、コメントが一目で確認でき、好みの局を簡単に見つけられるほか、無駄な情報が表示されずシンプルで使いやすいのは評価すべき点。その反面、ラジオ局のホームページやCDのオンラインショップへのリンク機能は設けられていないので、曲を聴くだけでなく関連情報やCDがほしいという人は、使い勝手が悪く感じられるかもしれない。

幅広いジャンルに力を発揮する iTunes4デフォルトのフォーマットAAC

iTunes4は、MP3、WAV、AACの各フォーマットに対応している。デフォルトは、AACの128kbpsに設定されており、ファイルのサイズはおおむね1分=1MB、CD1枚分のリッピングに約11分の時間がかかる。MusicMatchなどほかの音楽プレイヤーで取り込み済みのMP3ファイルは、iTunes4を最初に起動したときに自動で検索・読み込みを行ってくれるので乗り換えは簡単だ。ただ、WMAフォーマットには対応していないので、ウィンドウズメディアプレイヤーで音楽ライブラリーを作っている人は、すべてMP3に変換する必要がある。

AACとWMAでは音質にどのような違いがあるのか、iTunes4で再生するAAC 128kbpsと、ウィンドウズメディアプレイヤーで再生する

リッピングに要する時間

ソフト名	フォーマット	転送レート	時間
iTunes for Windows日本語版	AAC	128kbps	11分22秒
ウィンドウズメディアプレイヤー-9	WMA	128kbps	6分40秒
ウィンドウズメディアプレイヤー-9	WMA	64kbps	5分58秒
Open MG Juke Box	ATRAC3	134kbps	4分24秒

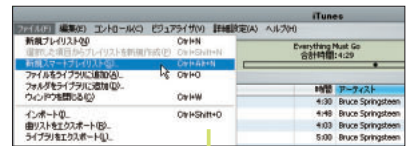
iTunes4は、デフォルトのAACでエンコードを行う。AACはほかのフォーマットに比べてリッピングにかかる時間が長くなるのが難点。

*約70分のCD全曲を音声データ最大読込10倍速ドライブ搭載のCeleron1.3GHzのパソコンで計測
*参考=マック版iTunes(AAC128Kbps)で同じCDをリッピングした場合5分30秒。マシンは1GHzデュアル

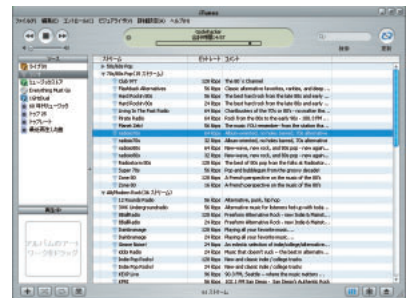


ジャンルやアーティスト名、現在の曲などが一目でわかるインターフェイスを持つiTunes4。

URL <http://www.apple.com/jp/itunes/>



自分の好きな曲順を作るプレイリスト機能が充実。いままで一度も再生したことのない曲などを集めて再生できる。



インターネットラジオ機能がジャンルやビットレートが並んだシンプルなインターフェイスで操作できるが、ここからCD購入サイトに移動する機能は付いていない。

WMA 128kbpsの音質を比較してみた。ちなみに、試聴ソースは、スティーリー・ダンのアルバム「Everything Must Go」から「The Last Mall」を選んだ。双方とも音のつぶ立ちのハッキリとしたヌケの良い音で取り込み、甲乙つけがたい。強いて言えば、WMAの方が、音の粒子1つ1つにエッジが立っており、ロック系が耳に馴染むようだ。AACの方は、高域から低域まで過不足なく表現されており、ジャンルを問わないオールマイティー型と言える。もし、音にこだわるユーザーならば、このあたりのiTunes4の“得意な音質”にも注目して導入を検討してみよう。

(山崎潤一郎)

OS	ウィンドウズXPまたはウィンドウズ2000
CPU	Pentium 500MHz以上のプロセッサ
メモリー	128MB以上の実装メモリー(256MBを推奨)

無線LANの電波強度を手軽に測定できる 胸ポケット収容サイズの無線チェッカー

WiFi Finder 33063

発売中

シャープ

価格: 3,480円

パソコンを起動しなくても 簡単操作で電波強度測定

ケンジントンテクノロジーが米国で販売している無線LANの電波強度を測定するためのデバイスであるWiFi Finderが日本でもシャープのブランドで発売されることになった。

このデバイスは、無線LANスポットなどで電波の入りが良い場所を確保したいときなど、いちいちパソコンを立ち上げて電波の強度を調べなくても、電波状況を調べられるという便利なもの。大きさは名刺とほぼ同じサイズで厚さも10ミリなので胸ポケットなどに入れて持ち歩いてもまったく気にならない大きさだ。また、無線LANをよく使うユーザーは、キーホルダー代わりにして常時アクセスポイントを探すといた使い方もできるだろう。

対応している無線LANは2.4GHz帯域を使用するIEEE 802.11bおよびIEEE 802.11gで、カタログ上の感度は約60メートル離れたところまで電波を拾えることになっている。利用方法はいたって簡単だ。真ん中のボタンを1回押すだけで、2秒に1回の間隔で周辺の無線の電波の強度はどのくらいかを測定する。ちなみに、ボタンを押した後、2分経過すると自動的に電源がオフになるので、ボタンを押す以外の操作はまったく必要ない。電波強度を示す値は、3つのLEDによって3段階に表示されるだけのシンプルなもの。電波が「弱」のときはLEDが1つだけ緑に点灯し、「強」のときに3つすべて点灯する。ちなみに電波をキャッチできないときは1つ目のLEDが2秒に1回赤く点滅する。

WarDrivingには使えないが
広い範囲の無線LANスポットで威力を発揮
WiFi Finderの売り文句の1つに、電子レンジやBluetoothなど無線LAN以外の電波をフィル

タリングする機能がある。実際に使用したところ、電子レンジやBluetooth機器に隣接した状態で使用すると、さすがに隣接した機器の電波を拾ってしまう。しかし、WiFi Finderとほぼ同時期に海外で販売を開始した別製品(日本未発売)とで電子レンジへの反応を比較してみたところ、他社製品が5メートル程度離れたところからでも最大～中程度の強度で電子レンジの電波を拾うのに対し、WiFi Finderは3メートル程度離れば拾わなかった。この程度の距離なら飲食店など実際の利用環境で電子レンジと無線LANの電波を混同してしまうことは少ない。フィルタリング機能についてはある程度信頼してもいいと言えるだろう。

WiFi Finderを使ったらWarDriving(セキュリティーで保護されていない無線LANアクセスポイントを探し回る行為)ができると思う人もいるだろうが、この製品は電波が出ているかどうかを調べるだけの機能しかなく、WEPキーの有無、MACアドレスフィルタリングの有無、ESSIDなどは当然ながら表示できない。また、同じ場所で複数の電波が出ていてもそれを見分けることができないので、WarDriving向きとは言えない。ただし、無線LANスポット、特に最近徐々に増えてきている屋外や商店街のアーケードなどある程度広い範囲で無線LANが使えるスポットで、無線の電波強度が強い最適な使用場所を特定するといった用途では十分威力を発揮できるだろう。

最後に、マニュアルが日本語表記になっていないのが残念な点であるが、前述のとおりボタンを押すだけで利用できる非常に簡単な製品なので実際の場面で困ることない。ただ、たとえば故障時の対応や修理方法などが英語ではわかりにくく、戸惑うユーザーは多くなるのではないだろうか。(五後ケースケ)



コンパクトサイズのWiFi Finder 33063。現在、シャープの周辺機器などを扱うオンラインショップ「kutikomi」にて販売されている。

URL <http://www.kutikomi.ne.jp/>



胸ポケットにも入るサイズ



電波の強度は3段階で表される。写真は2つなので、中くらいの電波強度といった具合で判定する。



電波が検出できないときは赤いランプが点滅。



電子レンジの横で測定すると、さすがに電波を検出してしまった。

サイズ	幅80×奥行75×高さ10(ミリ)
対応電波	IEEE 802.11b IEEE 802.11g
保証	1年保証

低価格、初心者向けセキュリティソフトは 価格の割に機能満載!

ウイルスセキュリティ2004
ソースネクスト

発売中

価格: 1,980円

必要最低限の機能は備わっている
難しい設定は必要なし

ウイルスセキュリティ2004は、ウイルス対策と不正侵入対策(ファイアーウォール)機能をまとめたコンピュータセキュリティ製品だ。他社製品でも導入されている機能の多くを、わかりやすいインターフェイスで提供しているながらも、2,000円を切る圧倒的な低価格を実現している点が大きな魅力となっている。

ウイルス対策機能では、侵入を試みるウイルスのリアルタイム検知や、受信する電子メールのウイルス検査が可能だ。また、ネットワークで接続されたほかのパソコンのものも含め、指定したファイルやフォルダのウイルス検査ができる。ウイルス検査を月、週、日単位でスケジューリングできる点も含めて必要最低限の機能を満たしているといえるだろう。

ファイアーウォール機能では、不審なアクセスを自動的に遮断する基本機能に加え、インターネット接続を使うアプリケーションを自動で検知して、そのアプリケーションが使うポートでの通信を許可してくれる機能も搭載している。アプリケーションごとにポートの開け閉めをするというパソコン初心者には難しかった設定を、この機能によって簡略化してくれているのだ。もちろん、コンピュータセキュリティ製品の“カナメ”である更新機能も搭載されており、ウイルス定義ファイルや本製品自体の自動更新が可能だ。

そのほか、あらかじめ登録した個人名などを基に個人情報外部へ送信されるのを監視する機能や、Cookieが保存されるのを監視する情報漏洩対策機能など、ほかのセキュリティソフトに引けをとらないラインナップとなっている。

ダイアログに答える必要なし 初心者でもとまどわない

本製品の目玉と言えるのが自動ウイルス駆除機能だ。この機能は、あらかじめウイルス検知時



*画面は開発中のもの

セキュリティ機能のオン・オフは設定画面から手軽に変更できる。新しいウイルス情報なども、この画面からリンクをたどることで確認できる。

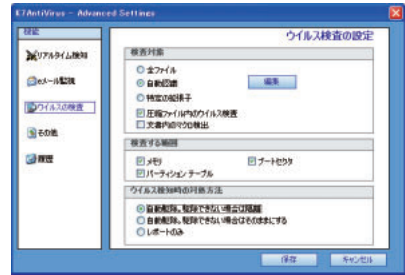
の動作を決めておくことで、ウイルス検知時にユーザーが確認ダイアログにいちいち応答することなくウイルス駆除を自動で完了できるものだ。ウイルス検知時の動作は「自動で駆除して、駆除できないものは隔離する」「自動で駆除して、駆除できないものはそのままにしておく」「駆除も隔離もせずにユーザーに報告だけ行う」の3種類から選択する平易なもの。ちなみに、自動駆除できなかったものは後でまとめて手動で駆除する。

ウイルス検知時に開く、専門用語ばかりの確認ダイアログにどう応答したらいいのかかわからず、ウイルスを駆除できなかった経験を持つ初心者ユーザーは多いだろうが、このソフトでは「駆除しましたのでご安心ください」などのダイアログが出るだけで、ユーザー自身がウイルス侵入時にアクションを起こす必要はない。

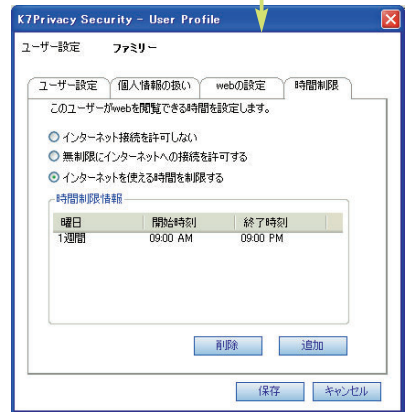
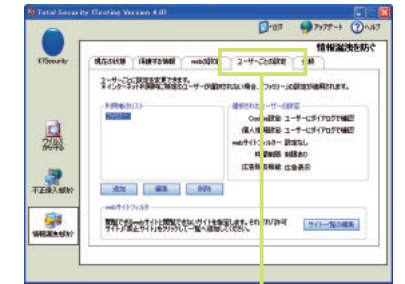
ちなみに、本製品が低価格を実現できたのは、インドでセキュリティ製品を長らく手がけてきたK7 Computingが開発元で、調達原価を安くできたことが大きく影響していると思われる。「価格が安いとセキュリティレベルが不安」と思う人もいるかもしれないが、上記の機能を備えているので一般の人が導入する分には他社製品と比べても問題のないセキュリティソフトだと言ってもよいだろう。(井上繁樹)



1,980円ながら、豊富な機能を有した「ウイルスセキュリティ2004」



ウイルス検知時の動作は、設定画面で変更できる。ただ単に駆除するだけでなく、発見した場合は隔離して保存しておき、後で削除するかどうかを決めることもできる。



Cookieを含め個人情報の送信について管理できるほか、広告除去、閲覧時間の制限などをユーザー単位に設定できる。

OS	ウィンドウズ98(SE)/Me/2000/XP
CPU	Pentium 100MHz以上
メモリー	64MB以上(128MB以上推奨)
ハードディスク空き容量	20MB以上
WWWブラウザ	Internet Explorer 5.0以降
備考	超速ADSL(ウィンドウズ98/98SE/Me)引越しまかせバック、凄速シリーズとの併用不可。RAID非対応。

業界初のPDFエクスポート機能を搭載 FAXの管理が大幅に効率化

まいと〜く FAX 7 Pro/Home 発売中
インターコム

標準価格: Pro 7,500円 / Home 4,800円

受信したFAXをPDFファイルに変換してメールに添付

インターコムは1982年の創業から企業向けに端末エミュレーターを一般向けにはパソコン通信ソフトをと、一貫して通信系のソフトを開発してきた老舗の通信ソフト開発メーカーだ。読者の中にも、初めて使ったパソコン通信ソフトが「まいと〜く」だったという方も多いことだと思う。現在はパソコン通信ソフトの開発は終了し「まいと〜く」の名称は「まいと〜くFAX」としてウィンドウズ用のFAX通信ソフトに引き継がれている。

パソコンがFAXモデムを装備していれば、ウィンドウズに標準装備されているFAX機能を使ってFAXの送受信は行える。ところが、その操作性や機能は必要最低限といったレベルで、プリントアウトなしにダイレクト送信できるメリットを含めても、積極的に利用したくなる機能ではない。その点、「まいと〜くFAX 7」はパソコンでFAXの送受信を行うことを考えて制作されたソフトらしく、大量のサンプルから自由に選択できるFAXの送付状など、機能や操作性に不足はない。

特に「まいと〜くFAX 7 Pro」には、会社などのFAXで文書を受信すると指定されたメールアドレスにFAX受信をeメールで知らせる機能があり、eメールの宛先を携帯電話にすればFAX受信をどこにいても知ることができる。さらに、このジャンルのソフトで初めて、受信したFAXをPDF形式に変換してメールに添付する機能が備わった(ほかTIF形式、JPEG形式、MSF形式が選択可能)。プラットフォームを選ばないPDF形式なら出先でパソコンを借用してもブラウザに困ることがないので会社に届いたFAXをすぐに見ることができる。ほかに、PDFのテキストを自動認識するOCR機能「ペーパーキャプチャー」が使えるので、FAXをその場でテキストデータに変換して編集加工できるなどのメリットも生ま

れるだろう。

Proから着信通知、モデム共有機能など職場で利用する場合に役立つ機能が省かれたバージョンがHomeだ。モバイル環境で、パソコンからFAXへの文書送信に使うだけならHomeでも十分だろう。

複数のユーザーで使うなら LAN経由でFAXモデムを共有できる

紙が情報を扱うメディアとして優れていることは否定できない事実だが、紙数が増えるに従って管理が面倒になってくる。簡単に言ってしまうと、「受信したFAXを溜め込んでしまうと目的のFAXがなかなか見付からなくなる」ということだ。その点、「まいと〜くFAX 7」なら、受信したFAXが山のように溜まることもなく保存できるので、過去に受信したFAXを日時や発信者から検索して見つけ出して、再プリントといったことが簡単になる。また、受信したFAXデータにビューア上でスタンプを押印(ハンコ機能)したり、文字を書き足すこともでき、記入して返信する必要があるFAXも、パソコン上ですべて処理が可能だ。

職場の全員でパソコンFAXを利用したい場合は「SOHO機能」を利用しよう。FAXモデムが接続されたパソコンを1台用意し、「まいと〜くFAX」をそのパソコンに「サーバー設定」でインストールする。ほかのパソコンでは「まいと〜くFAX」をクライアント設定でインストールすれば、LAN経由でFAXモデムが共有できる。ただし、「SOHO機能」を利用するには、クライアントもサーバーもすべてProを使う必要があり、Homeをクライアントとして利用することはできない。

このほかにも、IP電話や携帯電話などの回線にも対応するなどパソコンFAXを真剣に考えている方には、おすすめのソフトだ。

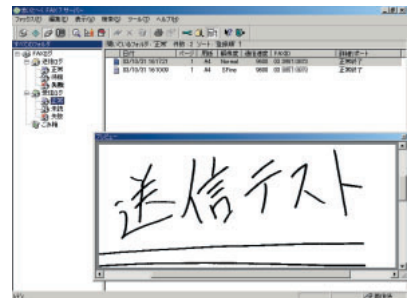
(中西敏夫)



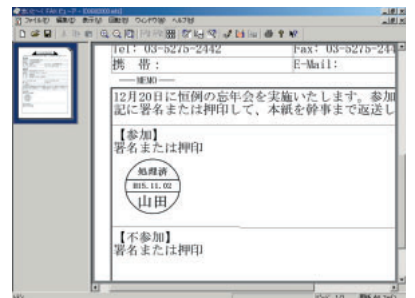
パソコンFAXに必要な機能をすべて備えた赤い箱のPro版。ほかにビジネス用途の機能などを削った低価格版のHomeがある。



ほとんどの操作がマウスだけで行える「パーチャルデスクトップ」。これを使ってFAXの送受信が行える。



受信したFAXの情報など各種ログ情報を見るには、この「FAXエクスペローラ」を立ち上げる。ここからFAXの検索などが可能だ。



受信したFAXにスタンプ機能で押印してコメントを書きペーパーレスで、そのまま返信することも可能。

まいと〜く FAX 7 動作環境

OS	ウィンドウズ XP/2000/Me/98
CPU	カラー Pentium II 233MHz以上 (推奨Pentium III 500MHz以上)
	モノクロ Pentium 200MHz以上 (推奨Pentium II 300MHz以上)
メモリー	カラー 64MB以上(推奨128MB以上)
	モノクロ ウィンドウズ XPは128MB以上 ウィンドウズ 2000 64MB以上 ウィンドウズ Me/98 32MB以上
ハードディスク	フルインストール時 約150MB以上



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社**インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp